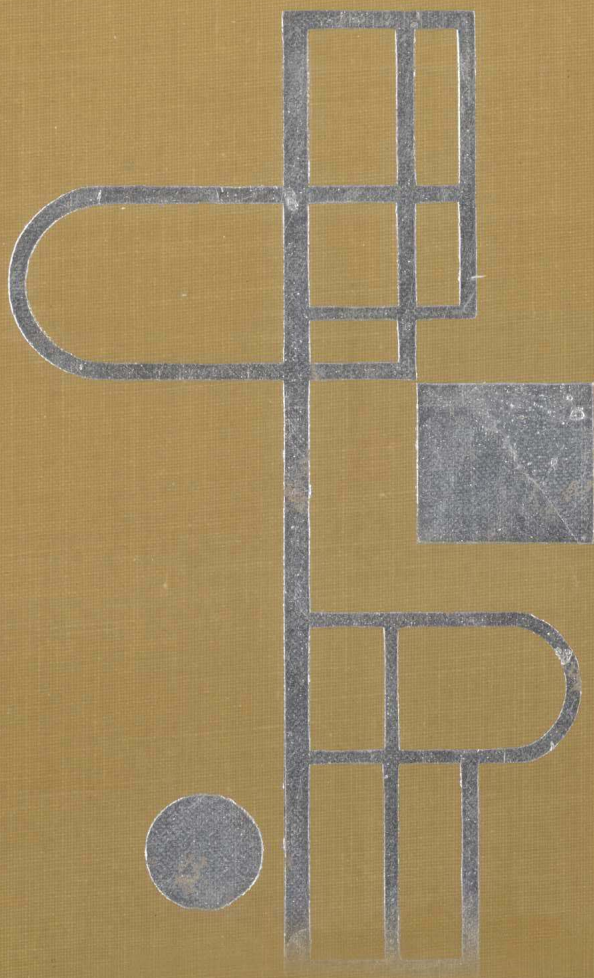
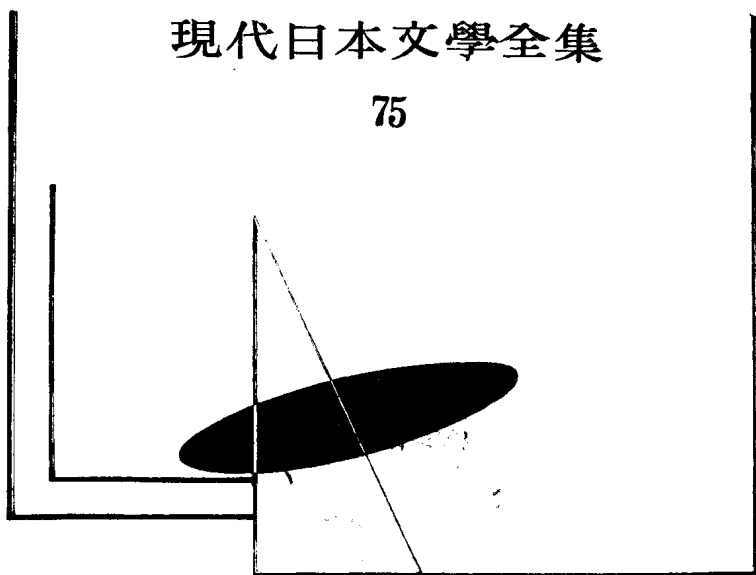




中 勘 助 内 田 百 閒 集

現代日本文學全集

75



筑 摩 書 房 版

中 勘 助
内 田 百 閒 集

昭和三十一年六月二十日 印刷
昭和三十一年六月二十五日 發行

著 者

中 勘 助
内 田 百 閒

發行者

古 田 晁

印刷者

多 田 基

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整 版 株式會社 精 興 社
印 刷 多田印刷株式會社
郵 本 有限會社 天島製本所

中 勘 助 集 目 次

銀の匙 五

提婆達多 六

菩提樹の蔭 二六

妹の死 一三四

鶴の話 一四〇

白鳥の話 一四四

飛鳥 一五九

藁科 一九三

内 田 百 閒 集 目 次

冥途 二九

旅順入城式 三二

山高帽子 三三

サラサーテの盤 三九

實説艸平記 二四六

賈作吾輩は猫である 二〇〇

素琴先生 三三三

フロックコート 三五四

漱石先生臨終記 三五七

十三號室 三六三

爆撃調査團 三六四

東京日記 三六六

古里を思ふ 三八四

中勘助の作品（小宮豊隆）	三六
内田百閒論（高橋義孝）	四〇

解説	四一
年譜	四二

装幀 恩地孝四郎

中
勘
助
集

猫の親子

中 勤 助

そととしの夏ごろだつた、近所の飼ひ猫ら

しい親猫が子供をつれてちよいちよいこの

庭へ遊びにきた。もと畑の中へ建てた家な

うで、そこで苗木を買つたり芽ばえをと

てきたりしてやたらに植ゑたりう、庭

いふよりは藪か雑木林にうかいほうで、廣

くなら地積に柿、アザ、柳、青楓、梅、桃、

銀の匙

前篇

—

私の書齋のいろいろながらくた物など、いれた本箱の抽匣に昔からのひとつの小箱がしまつてある。それはコルク質の木で、板の合せめごと、に牡丹の花の模様のついた繪紙をはつてあるが、もとは舶來の粉煙草でもはひつてゐたものらしい。なにもとりたてて美しいのではないけれど、木の色合がくすんで手觸りの柔いこと、蓋をするとき、ばんとふつくらした音のすることなどのために、今でもお氣にいらぬ物のひとつになつてゐる。なかには子安貝や、椿の實や、小さいときの遊びであつたこまこました物が、いづばいづつあるが、そのうちにひとつ珍しい形の銀の小匙のあることをかつて忘れたことはない。それはさしわたし五分ぐらゐの皿形の頭、わづかにそりをうつた短い柄がついてゐるので、分あつてできてゐるために、柄の端を指でもつ

てみるとちよいと重たいといふ感じがする。私はをりをり小箱のなかからそれを取りだして、丁寧に曇りを拭つてあかず眺めてゐることがある。私がふとこの小さな匙をみつけたのは今からみればよほど舊い日のことであつた。

家にもとからひとつの茶簞笥がある。私は爪立つてやつと手のとどくじぶんから、その戸棚をあけたり、抽匣をぬきだしたりして、それぞれの手ごたへや軋る音のちがふのを面白がつてゐた。そこに鼈甲の引手のついた小抽匣がふたつ並んでゐるうち、かたつばは具合が悪くなつて子供の力ではなかなかあけられなかつたが、それがますます好奇心をうごかして、ある日のことさきざ骨を折つてたうとう無理やりにひきだしてしまつた。そこで胸を躍らせながら疊のうへへぶちまけてみたら、風鎖だの印籠の根付だのといつしよにその銀の匙をみつけたので、譯もなくほしくなりすぐさま母のところへ持つてつて

「これをご覧ください」

といつた。眼鏡をかけて茶の間に仕事をしてゐた母はちよいと思ひがけない様子をしたが「大事にとつておきなさい」

といつてなくちきに許しがでたので、嬉しくもあり、いささか張合ぬけのきみでもあつた。その抽匣は家が神田からこの山の手へ越してくるときに壊れてあかなくなつたままになり、由緒のある銀の匙もいつか母にさへ忘れられてゐたのである。母は針をはこびながらその由來を語

つてくれた。

=

私の生れる時には母は殊のほかの難産で、そのころ名うてのとりあげ婆さんにも見はなされ、東桂さんといふ漢方の先生にきてもらつたが、私は東桂さんの煎薬ぐらゐではいつかな生れるけしきがなかつたのみか、氣の短い父が疳癪をおこして嘔みつくやうにいふもので、東桂さんはほとほと當惑して、漢方の本をあつちこつち讀んできかせては調劑のまちがひのないことを辯じながらひたすら潮時をまつてゐた。そのやうにさんざ母を悩ましたあげくやつとこのことで生れたが、そのとき困りはてた東桂さんが指に唾をつけて一枚一枚本をくつては藥箱から藥をしやくひだす様子は、私を育ててくれた馴れた伯母さんの眞にせまつた身ぶりにのこつて、いつまでも厭われることのない笑ひぐさとなつた。私は元來脾弱かつたうへに生れると間もなく大變な腫物で、母の形容によれば「松かさのやうに」頭から顔からいぢめんふきでものがしたので、ひきつづき東桂さんの世話にならなければならなかつた。東桂さんは腫物を内攻させないために毎日まつ黒な煉藥と烏犀角をのませた。そのとき子供の小さな口へ藥をすくひ入れるのには普通の匙では具合がわるいので、伯母さんがどこからかこんな匙をさがしてきて始終藥を含ませてくれたのだといふ話をきいて、自分ではつひぞ知らないことながらなんとなく懐しく

てはなしともなくなつてしまつた。私は身體ぢゆうのふきでものを痒がつて夜も晝もおちおち眠らないもので、糠袋へ小豆を包んで母と伯母とがかはるがはる瘡蓋のうへをたたいてくれると、小鼻をひこつかせてさも氣もちよささうにしたといふ。その後ずつと大きくなるまで虚弱のため神經過敏で、そのうへ三日にあげず頭痛に悩まされるのを、家の者は糠袋で叩いたせゐで腦を悪くしたのだといつて来る人ごとに吹聴した。そのやうに母に苦勞をかけて生れた子は母の産後のひだちのよくないためや手の足りないために、ときどき乳をのませるときのはかは、ちやうどそのころ家の厄介になつてゐた伯母の手ひとつで育てられることになつた。

三

伯母さんのつれあひは惣右衛門さんといつて國では小身ながら侍であつたけれど、夫婦そろつて人の好い働きのない人たちだつたので、御維新の際にはひどく零落してしまひ、ひきつづき明治何年とかの虎列刺のはやつた時に惣右衛門さんが死んでからはいよいよ家がもちきれなくなつて、たうとう私のところの厄介になることになつたのださうだ。國では伯母さん夫婦の人の好いにつけてこんで困つた者はもとより、困りもしない者までが困つた困つたといつて金を借りにくると、自分たちの食べる物に事をかいてまでも貸してやるので、さもなくしてさへ貧乏な家は隣ぐうちに身代かぎり同然になつてしま

つたが、さうなれば借りた奴らは足ぶみもしず
に蔭で

「あんまり人がよすぎるで」

などと嘲笑つてゐた。二人はよくよく困れば心あたりの者へ返金の催促もしないではなかつたけれど、さががすこし哀れなことでもいひだせばほろほろ貰ひ泣きして歸つてきて「氣の毒な 氣の毒な」といつてゐた。

また伯母さん夫婦は大の迷信家で、いつぞやなどは 白鼠は大黒様のお使だ といつて、どこからかひとつがひ買つてきたのを お福様とお福様 と後生大事に育ててゐたが、鼠算でふえる奴がしまひにはそろそろと家ぢゆう這ひまはるのをお芽出たがつて、なにか事のある日には赤飯をたいたり一升杓に煎り豆を盛つたりしてお供へした。そんな風で僅ばかりの金は人に借り倒され、米櫃の米は残らずお福様に食ひ倒されて、ほんの着のみ着のままの姿で、そのじぶん殿様のお供でこちらに引越してゐた私の家を頼りになるばる國もとから出てきたのださうだが、その後間もなく惣右衛門さんが虎列刺でなくなつたので、伯母さんはまったく身ひとつの寡婦になつてしまつた。伯母さんはその時の話をして それに異國の切支丹が日本人を殺してしまはうと思つて悪い狐を流してよこしたためにコロリがはやつたので、一コロリ三コロリと二遍もあつた。惣右衛門さんは一コロリにかかつて避病院へつれて行かれたのだが、そこで

はコロリの熱でまつ黒になつてゐる病人に水も
のませずに殺してしまふ。病人はみんな腹わた
が焼けて死ぬのだ といつた。

伯母さんは私を育てるのがこの世に生きてゐる唯一の楽しみであつた。それは、家はなし、子はなし、年はとつてゐるし、なんの楽しみもなかつたせゐもあるが、そのほかにもうひとつ私を迷信的に可愛がる不思議な譯があつた。といふのは、今もし生きてゐればひとつちがひであるはずの兄が生れると間もなく「驚風」でなくなつたのを、伯母さんは自分の子が死んでゆくやうに嘆いて

「生れかへつてきとくれよ。生れかへつてきとくれよ」

といつておいおいと泣いた。さうしたらその翌年私が生れたもので、佛様のお蔭で先の子が生れかへつてきたと思ひこんで無上に私を大事にしたのださうである。たとへこの穢いできものだらけの子でもが、頼りない伯母さんの頼みをわすれずに極樂の蓮の家をふりすてきたものと思へば、どんなにか嬉しくいとしかつたであらう。それゆゑ私が四つ五つになつてから、伯母さんは毎朝佛様へお供物をあげる時に——それは信心深い伯母さんの幸福な役目であつた。

——折折お佛壇のまへへつれていつて、まだいろはのいの字も讀めない子供に兄の戒名、伯母さんの考へによれば即ち私が極樂にゐた時の名まへであるところの 一喚即應童子 といふのを空に覺えさせた。

私は家のなかとはかく一足でも外へできには必ず伯母さんの背中にかじりついてゐたが、伯母さんのはうでも腰が痛い腕が痺れるのとこぼしながらやつぱしはなすのがいやだったであらう。五つぐらゐまでは殆ど土のうへへ降りたことがないくらゐで、帯を結びなほすときやなにかにどうかして背中からおろされるときなだか地べたがぐらぐらするやうな気がして、一生懸命袂のさきへばりついてゐなければならなかつた。そのころ私は浅葱のしごきを胸高にしめ、小さな鈴と成田山のお守りをさげてゐた。それは伯母さんのくふうで、お守りとはもとより怪我のないため、薄や川へ落ちないため、鈴は伯母さんが眼がかすんで遠くが見えないので、もしやはぐれたときその音をききつけて捜しにこようといふのである。併し年が年ぢゆう背中からおりたことのない子には鈴もお守りも實はまったく無用のものであつた。私は虚弱のため智慧のつくのが遅れ、かつ甚しく憂鬱になつて、伯母さん以外の者には笑顔を見せることは殆どなく、また自分から口をきくことはおろか家の者になにかいはれてもろくに返事もせず、よつほど機嫌のいい時ですらやつと黙つてうなづくぐらゐのもので、意氣地なしの人みしりばかりして、知らない人の顔さへみれば背中に顔をかくして泣きだすのが常であつた。私が瘦せほうけて肋骨があらはれ、頭ばかり大き

くて眼がひつこんでゐたために、家の者はみんな章魚坊主、章魚坊主といつたが、自分ではわが名の□ぼうを訛つて □ぼん と名のつてゐた。

五

私の生れたのは神田のなかの神田ともいふべく、火事や喧嘩や酔つぱらひや泥坊の絶えまないところであつた。病弱な頭に影を残した近所の家といへば、むかふの米屋、駄菓子屋をはじめ、豆腐屋、湯屋、材木屋などといふたちの家ばかりで、筋向ふのお醫者様の黒塀と殿様のところの——私の家はその邸内にあつた。——門構へとがひとときは目だつてゐた。

天氣のいい日には、伯母さんはアラビアンナイトの化けものみたいに背中にくつついてゐる私を背負ひだして、年よりの足のつづくかぎり氣にいりさうなところをつれてあるく。ちぎ裏の露路の奥に蓬萊豆をこしらへる家があつて、倶利伽羅紋の男たちが贊鼻褌ひとつの向ふ鉢巻で唄をうたひながら豆を煎つてゐたが、そこは鬼みtainな男たちが怖いのと、がらがらいふ音が頭の心へびくのとで嫌ひであつた。私もしさうしたいやなところへつて行かれればちぎにべそをかいて身體をねぢくる。そして行きたいはうへ黙つて指さしをする。さうすると伯母さんはよく化けものの氣もちをのみこんで間違ひなく思ふはうへつてつてくれた。

いちばん好きなところは今も神田川のふちに

ある和泉町のお稻荷さんであつた。朝早くなど人のゐないときには、川へ石を投げたり、大きな木の實のやうな鈴を鳴らしたりしてよく遊んだ。伯母さんは私を塵のなさうな石、またはお宮の段段のうへなどにおろしてお詣りをする。孔あき銭がからからとおちてゆくのが面白い。どこの神様佛様へいつてもなにより先に この子の身體が丈夫になりますやうに といつてお願ひするのであつた。

ある日のこと私が後ろから帯をつかまへられながら木柵につかまつて川のはうを見てゐたら、水のうへを白い鳥が行きつもとどりつ魚を漁つてゐた。その長い柔かさうな翼をたをたと羽ばたいてしづかに飛びまはる姿は、ともすれば苦痛をおぼえる病弱な子供にとつてまことに恰好な見ものであつた。それで私はいつにない上機嫌であつたが、折あしくそこへ玉子と麥粉菓子（あま）を背負つた女のおきんが休みにきたもので、れいのとほりすぐに伯母さんの背中へくつついた。女は荷をおろして、かぶつてゐた手拭をとつて襟などふきながら、なんのかのと上手に愛想をいひいひさしもの弱蟲を手なづけてしまつて、そろそろ背中から降りかけるじぶんにはもう麥粉菓子の箱をあけて私を釣りにかかつた。女は小判なりの蠟のたかい麥粉菓子をとりだして指のさきにくるくるとまわしながら

「坊ちゃん 坊ちゃん」

と手にもたせてくれたので、伯母さんはしかたなしにそれを買つた。今でさへ、あの澁紙ばり

の籠を大儀さうに肩からはづして、なかば裸がらに埋まつてゐる白い、うす赤い卵や、ぶんと匂のあがる麥粉菓子などを見せられると、ありつたけ買つてやりたい氣がしてならない。お稻荷さんはその後立派になり、眠かにもなつたが、その時の柳ばかりは今も涼しく願ひてゐる。

六

お稻荷さんへ行かない日にはきたない財布にお饗錢と木戸錢用の小錢を入れて牢屋の原へつれてゆく。それは有名な傳馬町の牢屋のあとで、いろんな見世物がしよつちゆうかかつてゐた。また小あきんどが露店をならべて、蝶螺の壺焼や、はじけ豆や、蜜柑水や、季節になれば唐もろこし、燒栗、椎の實などもうる。紅白だんだらの幕をはつた見世物小屋の木戸に拍子木と下足札をひかへてあぐらをかいてゐる男は手を口へあてて、ほうばん、ほうばん、と呼びたてる。鎖につないだ山犬の鼻さきへ鶏をつきつけて悲鳴をあげさせるのもある。お皿のある怪しげな河童が水溜のなかでぼちやぼちやるものもある。でれん左衛門は貝をぶうぶう吹いて金の棒みたいなものをきんきん鳴らしては、でれんでれん、といふのでさつぱり面白くなかつたけれど、伯母さんは自分が好きだもので度度つれていつた。あるとき珍しく人形芝居がかつたことがあつて、櫻がいちめんに咲いた草山に繪草紙でゐるお姫様みたいな人が鼓をもつて踊つてゐるところの繪看板があがつてゐた。私は

大喜びでそこへはいつたが、忽ちかちやんかちやんと恐しい音がして顔も手足もまつかな奴がねぢくれた標をかけて飛び出したので、びつくりしてわあわあ泣きだしてしまつた。後できけばそれは千本櫻の狐忠信だつたのださうだ。

氣にいつた見世物のひとつは駝鳥と人間の相撲であつた。ねぢ鉢巻の男が擊劍のお胴をつけて、鳥が戦ひを挑むときのやうにひよんひよん跳ねながらかかつてゆくと、駝鳥が腹をたててばつばつと蹴とばすのである。ある時は駝鳥のはうが頸ねつこを押へつけられて負けになり、ある時は男のはうが蹴たてられて、まゐつたまゐつた。といつて逃げだした。そのあひだに交代の男がかた隅で辨當をつかつてゐたのを、相手をなくしてぶらぶらしてゐたもう一羽の駝鳥がこつそり寄つてつていきなり辨當を吞まうとしたもので、男はあわてて飛びのいた。その様子がをかしかつたので見物人はどつと笑つた。伯母さんは「駝鳥がひもじがつとるにござんももらへんで氣の毒な」といつて涙をこぼした。

七

私のやうな者が神田のまんなかに生れたのは河童が沙漠で解つたよりも不都合なことであつた。近處の子たちはいづれも神田つ子の卵の腕白ばかりで、こんな意氣地なしは相手にしてくれないのみか、すきさへあれば辛いめをみせる。

なかでもむかふの足袋屋の息子などは伯母さんがぼんやりしてゐると後ろからだしぬけに人の横づつ頬をはつつけては逃げて行き行きしたもので、私はひどくおぢけてとかくひつこみがちになつてしまつた。家にゐるときには往來へむいた高窓にのせ、格子につかまらして、伯母さんが後からおさへながら馬や車や目にふれるものの名など教へて遊ばせてくれる。筋向ふの米屋に車に轢かれたちんばの鶏がゐて、羽根や尻尾がぼろけて塵にまみれながらいつ見ても片足をあげてゐるのを、伯母さんは見るたんびに可哀さうがつたので、終ひには私までがその鶏を見るのが厭はしくなつてきた。ふだん遊ぶのはお佛壇のあるごく陰氣な三疊で、夜はそこが寢室になり、ときどきは姉たちの自修室にもなつた。そのころ十二三で小學校へ通つてゐた二人の姉が西洋の狀袋の形した包みからまつ黒なお草紙をだして、古い木机のうへにひろげて手習ひをしたことをおぼえてゐる。その机のひとつは長さ三尺ぐらゐの、抽匣が二つついたので、つまみがとれたあとの孔へ筆のぢくに紙をまいたのがさしてあり、もうひとつはわづかに子供の膝がはいるくらゐのもので、浅い抽匣がついてゐたが、これらの机は兄から姉へ、私から妹へと、何十年かのあひだ順順に譲り渡されることになつた。それを踏臺にして庭に向つた窓のうへへあげてもらふと黒塀のそばにある大株の躑躅がみえる。夏になればまつかな花が山盛り

ては蜜を吸つてゆく。そのあわただしく翅をはためかすのを面白く眺めてゐると、伯母さんは後ろから肩越しに顔をだして、黒い蝶蝶は山家のお爺で、白いのや黄いろいのはみんなお姫様だといふ。お姫様は可愛いが山家のお爺がまつ黒な大きな翅をはばたいて飛びまはるのがおそろしい。伯母さんはまた草紙で丹念にはつた皮籠からいろいろの玩具をだして遊ばせてくれる。澤山の玩具のなかでいちばん大事だつたのは表の薄から拾ひあげた黒ぬりの土製の小犬で、その顔がなんとなく私にやさしいもののやうに思はれた。伯母さんはそれをお犬様だといつて、あき箱やなかでこしらへたお宮のなかにすゑて拜んでみせたりした。それからあのぶきつちよな丑紅の牛も大切であつた。これらは世界にたつた二人の仲よしのお友だちである。

へ

そのほか刀、薙刀、弓、鐵砲など、あらゆる戦道具もそろつてゐた。伯母さんは私に烏帽子をさせたり、鎧どほしをさせたり、すつかり戦人にしたててから、自分も後ろ鉢巻をし、薙刀をかいこんで、長い廊下の兩はじに陣どつて戦ごつこをする。支度がととのへば雙方眞顔になつて身構へをしながらしそそろと近づいてゆく。廊下のまんなかで出會ふやいなや私が「四王天か」と聲をかける。敵は「清正か」

といふ。そして同音に「よいとこであつたな」といふと同時に

「やあ、たかたかたかたか」

と口で拍子をとりながら暫くは勝負もみえずきりむすぶ。これは山崎合戦の場で、私は加藤清正、伯母さんは四王天但馬守なのである。そのうち二人は得物をすてて取組みあふ。大立廻りのする四王天は清正がいいかげんくたびれたころを見はからつて

「しまつたあ」

とさも無念さうにいつてばつたりと倒れる。それを鼻たかだかと馬乗りになつておさへつけると伯母さんは汗をだらだら流しながら下から

「繩はゆるせ。首斬れ」

とどこまでも四王天でくる。そこで清正が脇差をぬいて皺くちやな頸をどしどし斬るまねをするのを四王天が顔をしかめてこらへながら目をつぶつてぐにやりと死んだふりをすればひと先づ勝負がつくことにきめてあつたが、雨の日などには七八遍もおんなじことをくりかへして、しまひに四王天がひよろひよになるまでやらせた。伯母さんは

「まあどもならん どもならん」

と泣き聲をだしながらも、あきてやめようといふまではいつまでもやつてくれる。とうかすると伯母さんはあんまり疲れて首を切られてしまつてもなかなか起きあがらないことがある。さうすると ほんとに死んだんぢやないかしら

と思つて氣味わるるゆるりおこしてみたりした。

九

明神様のお祭りの時は場所がらおそろしい景氣で、町内の若い者が軒なみに紅白の花をうち、巴と日の丸の提灯をさげてあるく。家の軒にも花をうつて提灯をさげるのが嬉しい。その日には店の毛氈をしきつめてしじんけんをかざる家があつた。でこでこの頭が二つ、恭しく段のうへに据ゑられ、巻奉書のそぎ竹のやうなのがつくんと立つて、大きなお神酒徳利が供へられる。金色の獅子は銀の眼玉をむいててつべんに寶珠をいただき、まつかな狛犬は金の眼玉を光らせて臺をふりみだしてゐる。伯母さんはお犬様や丑紅の牛をお友達にした手ぎはで獅子や狛犬までも仲よしにしてしまつたので、私はその怖らしい顔を見ても泣きだすやうなことはなかつた。揃ひの浴衣をきた町内の若い者からやつと足の運べる子供までが向ふ鉢巻にかひがひしく鬱金の麻襪をかけ——私はあの鈴だのおきあがり小法師だのをつけた麻襪が大好きである。——白足袋のはだしにむりむりした腰をみせて出来るだけ大きな萬燈をふつてあるく。軒なみの提灯のなかに、町をとびまはる萬燈のなかに、蠟燭の焰がちらちらとまたたく。紅白に染めつけた頭でつかちの萬燈のさきにふつさりと御幣のさがつたのがきりきりと宙にふりまはされるのは氣もちのいいものである。各町内の要所要所には大供子供の一團が樽御輿をとりまいて喧

嘩の手筈をしめしあはす。そんなことの好きな伯母さんは私にも人なみに襦をかけ、鉢巻をさせて表へつれだした。私ははしよつた着物の下から赤いふらんねるの股引をだして、長い袂を襦にはさんで伯母さんの背中に小さな萬燈をもつてゐた。さうしたらとある樽天王のまはりにかたまつてゐた腕白どものひとりが見つけて「えくしょ。女におぶさつて萬燈ふつてやがら」といひながらいきなり二つ三つ石をたたきつけた。伯母さんははらはらして

「弱い子だにかねしとくれよ」と急いで歸らうとするのを、二三人の奴がばらばらと追つかけてきて足をひびつてひきずり落さうとしたので、私は頸つたまに獅噛みついて火のつくやうに泣きだした。伯母さんは喉をしめる手をひきはなしひきはなし

「かねせるだ かねせるだ」といつて逃げて歸つた。さうしてほとと息をついたときに折角の萬燈と下駄をかたかた落してゐるのに氣がついた。淺葱の紐でいはへる大事の下駄であつたものを。

病身者の私はしよつちゆうお醫者様の手をはなれるまがなかつたが、仕合せなことには烏犀角の東桂さんが間もなく死んだので代りに「西洋醫者」の高坂さんにみてもらふやうになり、東桂さんが一生懸命ふき出さした腫物は西洋の

薬できれいに洗はれてちぎによくなつてしまつた。この人は顔の怖いに似ず子供の機嫌をとることが上手であつた。で、それまで東桂さんのまづい煉薬にこりごりしてゐた私も喜んで甘味をつけた水薬をのむやうになつた。そのうち私と母の健康のためにどうでも山の手の空氣のいいところへ越さなければ、といふ高坂さんの説によつて、幸ひそのとき殿様のはうの御用もひととほり片附いて暇になつてゐた父は、自分の役目を人にわたして小石川の高臺へ引越すことに決心した。

いよいよひき移るといふ日にはみんなして私にもうこの家へは來られないのだ、といふことをよくよくいつてきかせたが、私は出入りの者が手傳ひにきて大騒ぎをするのが面白く、また伯母さんと相乗りのにせられて傳を列ねてゆくのが嬉しくて元氣よく喋つてゐた。暫くして路がだんだん淋しくなり、しまひに赤土の長い坂をのぼつて——それまで坂といふものを知らなかつた。——今度の住居だといふ杉垣に圍まれた古い家についた。

二

このへんのものはみな杉垣をめぐらした古い家に靜に住んでゐる。おほかた舊幕時代から代住みつづけてゐる士族たちで、世がかはつて零落はしたがまだその日に追はれるほどみじめな有様にはならず、つまやかにのどかな日をおくつてゐる人たちであつた。それに人家もす

くない片田舎のことゆゑ、近處同士は顔ばかりか家のなかの様子まで知りあつて、お互に心やすくしてゐる。朽ちたまま手をいれない杉垣のうちにどこにも多少のあき地があつて果樹など植ゑられ、屋敷と屋敷のあひだには畑がなくば茶畑があつて子供や鳥の遊び場になつてゐる。畑、生垣、茶畑、目にふれるものとして珍しく嬉しくないものはない。私の家は隣のかなり廣いあき地へ普請をするので、その出來あがるまでかりにこの家に住むのである。暗い陰氣な玄關のわきにはゆづりはの木があつたが、その葉も赤いぢくも氣にいつた。すべつこい葉をとつて唇にあてたり、頬をこすつてみたりする。越してきたあくる日に誰かが蟬をとつて有合せの鳥籠に入れてくれた。これまで見たことも聞いたこともないものゆゑ面白くはあつたけれど、そばへよるとあばれてぢやんぢやんいふのが怖かつた。

私は毎朝はやく起されて草ぼうぼうとしたあき地を跳で歩かされる。ぺんぺん草や、蚊帳つり草や、そこにはえてゐる草の名をおぼえるだけでも大變な仕事である。そのじぶん八十ぢかつた祖母も坊主頭に毛繻子の頭巾をかぶつて杖をつきつきいしよに露をふんでゐる。祖母は性のいい三つ栗を裏の垣根のくろへ埋めてこれは孫たちが大きくなるころには採つて食べられるやうになる、といつてゐた。祖母がなくなつてから私どもはそれを お祖母様の栗と名づけて大切にしていゐたが、この節では

三本ながら立派な木になつて、秋になればその昔の孫たちが衆に幾杯かの栗を落して自分の子供にむいてやるやうにさへなつた。

そのうちに普請がはじまつた。材木をひいてきた馬や牛が垣根につながられてゐるのを伯母さんにおぶさつて怖怖ながら見にゆく。大きな鼻の孔から棒みたいな息をつきながら馬は杉の葉をひきむしつてはくひ、牛はげぶつとなにか吐きだしてはむにやむにやと嚙む。落ちつきのない長い顔の馬よりもおつとりして舌なめずりばかりする丸顔の牛のほうが好きであつた。普請場には鑿や、手斧や、鉞や、てんでんの音をたててさしだも沈んだ病身ものの胸をときめかせる。職人たちのなかに定さんは氣だてのやさしい人で、削りものをしてゐるそばに立つて鉋の凹みからくるくと巻きあがつては地に落ちる鉋屑に見とれてゐると、いつもきれいさうなのをよつて拾つてくれた。杉や檜の血の出さうなのをしやぶれば舌や頬がひきしめられるやうな味をする。おが屑をふつくらと兩手にすくつてこぼす指の又のこそばゆいのも嬉しい。定さんはいつも人よりか後に残つてばんばんといひ音のする拍手をうつてはお月様を拜んだ。私はいつまでも仕事場にうろついてゐてそれを見るのを楽しみにしてゐたが、ほかの職人たちは定さんに變人といふあだ名をつけて、ああいふ野郎はきつと若死にする などといつてゐた。きれいに幣目のたつた仕事場のあとを見まはると今までの賑かさにひきかへしんしんとして夕靄

がかかつてくる。私は残り惜しく呼びいれられてまた明日の朝をまつ。そのやうに湧きたつ木香に酔つてなんとなく爽やかな氣もちになりながら日に日に新しい住居が出来てゆくのを不思議らしく眺めてゐた。

三

すこしばかりの茶畑を間にして南隣りに少林寺といふ禪寺があつた。その寺内が廣いのと、信心ぶかい伯母さんにはお寺といふものがなんとなく懐しかつたのであらうために、私はときどきそこへつれてゆかれた。門から玄關まで二十間ばかりのあひだ二行に敷かれた石の兩側が荒れた茶畑になつて、ところどころ杉の木やなにか立つてゐる。私はよくその茶の花をとつてもらつたが、枝にもろいその花はひとつとるとはばらばらといくつもいつしよに散つて地に落ちた。また雨のあとなどには茶の木茶の木に雫がいつぱいたまつてきらきらと光つてゐる。なんの奇もないながらかすかなさびのある茶の花は稚い折の思ひ出にふさはしい花である。圓みをもつた白い花瓣がふつくらと黄色い蕊をかこんで暗緑のちぢれた葉のかげに咲く。それをすつぽりと鼻へおしつけてかぐのが癖であつた。左りての閼伽井のそばの木犀は花がさげば甘い香を漂はせ、その井戸車の軋る音は静な茶畑をこえて私の家までもひびく。本堂の玄關にある大きな衝立には極彩色の孔雀がかいてあつた。雄鳥が衰のやうな尾をさげてなにかにとまつて

ゐるそばにやや小さい雌鳥が身を屈めて啄むやうな姿勢をしてゐる。そのまはりに咲きみだれたいろいろの牡丹の花には蝶蝶がいくつか戯れてゐた。

また折折は近處の大日様へつれていつて遊ばせた。私がねぢねぢの太い綱をもつてこんこんと鰐口を鳴らすと、伯母さんはお賽銭をなげておまゐりをする。さうして腦病のなほるやうに私の頭とお賓頭盧様の頭をかはるがはる撫でて、それから今度は自分の眼をさする。お賓頭盧様はてかてかした手垢だらけの本地をだして、大きな眼をむいて臺のうへに足を組んでゐた。大日様には方方のお寺にあるやうに柿色や花色の奉納の手拭のさがつた掘りぬき井戸があつて、草雙紙に阿波の鳴戸のお鶴がもつてゐる曲物の柄杓が浮いてゐた。伯母さんはそのお水をありがたさうに手にうけて眼を冷してから小さくなつた目を見ひらいてみて

「お大日様のお蔭でちいとはようなつたやうな」といふ。

この大日様のおみくじは大層よくあたるといふ評判で遠方からわざわざひきにくる人さへあつた。それで伯母さんはあるとき私の病身がよくなるかどうかを伺つてみたことがあつた。お堂のわきの障子のたつてゐるところへいつて「お頼み申します」

といつたら「はい」

といつて頭を青青と刺つた若い坊さんが顔をだした。伯母さんは一部始終を話しておみくじを頼んだ。坊さんは本尊様のまへへいつて暫く拜んでから がらり がらり がらがらと調子をつけて幾度も箱をふつたのち一本のおみくじをひいてきてその文句を丁寧に紙に書いてくれた。伯母さんは「四角い字」が讀めないの坊さんはいちいち譯をといてきかせたが、それはこの子は將來丈夫になつて仕合せをするといふのだつたものでほくほく喜んで歸つてきた。

三

一町ほど淋しいはうへゆくと木槿の生垣をめぐらしたあき地に五六羽の鶏を飼つて駄菓子を買つてゐる爺さん婆さんがあつた。私ははじめ見る蘆屋根や、破れた土壁や、ぎりぎり音のする撥ね釣瓶などがひどく氣にいつて、伯母さんとそこへ菓子を買いにゆくのが大きな楽しみのひとつになつた。爺さん婆さんは耳が遠くで呼んでもなかなか出てこない。さんざ呼んでゐるとそのうちやつとこさと出てきてあつちこつち菓子箱の蓋をあけてみせる。きんか糖、きんぎよく糖、てんもん糖、微塵棒、竹の羊羹は口にくはへると青竹の匂がしてつるりと舌のうへにすべりだす。飴のなかのおたさんは泣いたり笑つたりしていろんな向きに顔をみせる。青や赤の縞になつたのをこつきり噛み折つて吸つてみると縹のなかから甘い風が出る。いちばん好

きなのは肉桂棒といふのであつた。それはあるへいの棒に肉桂の粉をまぶつたもので、濃厚な甘みのなかに興奮性な肉桂の匂がする。あるひどい雨の日に私はどうしてか急に爺さん婆さんが可哀さうになつて、それと同時に肉桂棒がはしくなつてきかないので、伯母さんは私を半纏におんぶして出かけたが、あいにく肝心の肉桂棒がなかつたため私はがっかりして泣いて歸つたことがあつた。「牛の乳」をおとなしくのんだり、むづからずによく遊んだりした日には御褒美にがらがらを買つてくれる。桃や蛤の形の紅白に染めわけたのを背中であつて楽しみながら歸つてわつてみると、紙でこしらへた小鼓やブリッキ製の笛などがでる。それを賣ものみたいに大事がる。また泥色の皮で三角に包んで合せめを役者の似顔で封じたのもあつた。

四

生れつきの虚弱のうへに運動不足のため消化不良であつた私は、蜂の王様みたいに食ひ物を口に押しつけられるまでは食ふことを忘れてゐて、伯母さんにどれほど骨を折らせたかわからない。羊羹のあき箱に握飯をつめて伊勢詣りといふ趣向で、伯母さんが先に立つて庭の樂山をぐるぐるまはり歩いてあげく石燈籠のまへで拍手をうつてお詣りをして、松の蔭にある石に腰をかけてお辨當をたべたこともあつた。またあるときは妹や乳母もいつしよに待宵の咲いてゐる原へ海苔まきをもつていつて食べたこともあ

つた。杉や榎や樺などの大木が立ちならんだ崖のうへから見たすと、富士、箱根、足柄などの山山がかうかうと見える。私はいつになく喜んで晝飯をたべてゐたのに折あしくむかふから人がきたもので、すぐさま箸をはふりだしてもう歸る といひだした。生きもののうちでは人間がいちばん嫌ひであつた。そんな風で私がなにを食べてもうまがらないのを、伯母さんは獨得の辯舌で上手に味をつけてたべさせる。蛤の佃煮はあの可愛い蛤貝が龍宮の乙姫様のまへを舌を出して這つてあるくといふことのために、また竹の子は孟宗の親孝行の話が面白ければかりに好きであつた。むつくらした竹の子を洗へばもとのほうの節にそうて短い根と紫の疣がならんでゐる。その皮を日にすかしてみると金いろのうが毛がはえて、裏は象牙のやうに白く筋目がたつてゐる。大きなのは頭にかぶり、小さなのはけばをおとして梅干を包んでもらふ。暫く吸つてゐるうちに皮が紅色に染まつてすっぱい汁が滲みだしてくる。はちくも好きであつた土鍋でぐつぐつ煮ながらさもさもおいしさうな様子をして煮えくりかへる竹の子の味をきくのをみれば、さすがの蜂の王様も奥歯のへんに唾のわくのをおぼえた。ときどきあまえて自分箸をとらないと伯母さんは彩色した小さな茶碗を口へあてがつて

「すすめごだ すすめごだ」

といひながら食べさせてくれる。鯛は見た目が美しく、頭に七つ道具のあるのも、恵比壽様が

抱へてゐるのも嬉しい。眼玉がうまい。うはつらはばくばくしながらしんは柔靱でいくら噛んでも噛みきれない。吐きだすと半透明の玉がかりりと皿に落ちる。齒の白いのもよい。

主

その頃□□さんといふ氣ちがひがゐた。古い人の話によれば若いとき大變學問にこつて本ばかり讀んでゐるうちに慢心して氣がふれたのだといふ。髪を蓬蓬とのぼして、垢と煤とでこれらの生えた身體に焼けこげだらけの襦袢をき、太い竹の杖をついてなにか考へこみながら、夏となく冬となく跣のままさもしづかにさまよひあるく。昔を知つてゐる人たちが氣の毒がつてむすびやなどやると鐵鉢をもつやうな形に大切に手にのせて歸つてゆくが、たまたま身體につけるものを施す人があつても不承不承に一日二日着るばかりでぢきにもとの襦袢と着かへてしまふ。彼は私の家から二町ほどはなれたある農家のそばに穴を掘つて、そのなかで年ぢゆう焚き火をしてゐた。さうして氣のむいたときには穴から出かけ、足のむくはうへ行きただけいつて、いやになればくるりと向きなほつて戻つてくる。そんなにして雨の日も風の日も何遍となくそのへんを歩きまはるのが常であつた。それゆゑどうかして一日その姿が見えないことがあると、人は 今日□□さんが機嫌がわるいのだといひ、また三日四日も續けて出ないときには かげんがわるいのぢやないか といつ

て氣の毒がつたりした。をかしなことに彼は往來で女に行きあへば三足三足あとへさがつてさも穢はしさうにべつべつと唾をはく。潔癖な伯母さんははじめて□□さんを見たときからその垢臭いのを氣にして、彼が三足さがらないうちこちから引返してしまふくらゐであつたが、ある日私をおぶつてれいの駄菓子屋へゆく途中でばつたり出くはしたら伯母さんはこらへかねて

「五錢あげるで、頼むに顔洗つとくれんか」といつて帶のあひだから財布を出しかけた。それにはさすがの□□さんもすこし驚いたやうにたちどまつたが、さもさもないまいしさうに首をふつて、唾を吐くのさへ忘れて足ばやに歸つていつた。この狂人はそののち私が一人前の腕白になるまでも生きてゐたが、ある日のこと□□さんが昨夜のうちに焼け死んだ といふ噂がたつたのでこはごはその穴を覗きにいつたらいつもの竹杖が粗朶といつしよに焼け残つてるばかりで、□□さんの姿は見えなかつた。

主

伯母さんは「木の實どち」をして遊ばせるといつて白玉椿の實を落してくれたが、眼が悪いのと力がないのとで、狙ひをはづして枝葉ばかり叩き落した。木の實どちといふのは國の遊びで、椿の種子のあるきめられた形のもののうちからいくつかを擇んでめいめいが同じ數だけ出しあひ、それをいつしよにしてひとりづつかは

るがはる兩手のなかでふつてから疊のうへにあけてみて、白い芽の痕が多く上に出たものを勝ちとして種子のとりつこをするのである。その恰好と重心の關係によつて種子に勝負のうへの強弱がある。なかには漆を塗つて飾つたり、強くするために狡猾に鉛をつぎこんだりするものもあるといふ。落した實を拾ひあつてて殻をわると、舟のやうなのや、鎗のやうなのや、つやつやしたのが隔壁のなかにしつくりとくひあつてゐる。その形にしたがつて もう、じやあ、とこ、かい などと呼ばれる。そんなにして五六十の種子をあつて、靜な雨の日を木の實どちをして暮したこともあつた。

夏になればいろいろな形をした雲の塊が日光にあふれてぎらぎらする空を動いてゆくのを、伯母さんは あれは文殊様だの、あれは普賢菩薩様だのとまことしやかに教へた。ある日のこと遊び疲れた私はひとり寐ころんで自分をまもつてくださる佛様の姿に似た雲のくるのを眺めてゐた。さうしたらちやうどそこへ通りかかつた雲の、觀音様の仰むけになつたやうなのが不意に崩れて恐しい形になつたので、私は化けものが觀音様になつてとりにきたのかと思つてあわてて伯母さんのところへ逃げていつた。それから私はさういふ形の雲を死人觀音と名づけて、その影をみればすぐにかくれてしまつた。

皮籠には山崎合戦の戰道具のほかにおもちゃもはひつてゐたが、なかにも鼓と笙の笛は秘藏の寶ものであつた。笙の笛の黒塗の壺には菖草

の蒔繪^{しきえい}がしてある。その輪がたにならんだ長い短い管の ひゆひい と柔い維多な音をだすのが弱い神經に程よい快感をあたる。鼓は私の小さな肩にふさはしいほどのもので、緋のしらべの緒、面白い胴の形などみな氣にいつてゐた。なんでもちよいちよいかじつてゐる重寶な伯母さんはひとに鼓をうたせながら、自分は太鼓を大革にしてい^{いか}排に拍子をあはせる。そのほかおしろい刷毛にした鬼の手だの、骨のたつたとき喉をさする鶴の嘴だの、目貫をどうとかする眞鍮の才植だの細かいものは、小抽匣の澤山ついた簞笥の口ぼんの抽匣といふのにしまつてあつた。私はそのなかでどれがほしいといふやうなことはつひぞいつたことがなく、伯母さんがあれかこれかとひとつひとつ出してみせてうまくなつてゐるまでは首をふつてぐづぐづいつてゐるが、大抵の時はれいのお犬様と牛を出されれば機嫌がなほつてしまふ。なにか氣にいらなくて手あたりしだいにはふりだすと、腹も立てずにどこかわるいのではないかと心配してぢきに額を押へてみる。熱があればすぐにお醫様へつれてゆかれるのである。それがいやさに額をおさへられるとへなへなとおとなしくなつてしまふ。菊のさくころならば伯母さんは

「菊毛氈をつくつたげるにおとなしうせるだよ」といつて、裏畑から菊をとつてきて菊毛氈をこしらへてくれる。それはいろいろの菊のさまざまの花びらを亜刺比亞模様のやうに紙にしいて、

暫く壓しをかけてから出してみると匂のいい毛氈になつてゐるのである。私は菊毛氈が大好きであつた。

また本箱にいつばいある草雙紙をぶちまけて氣のながい伯母さんにあとからあとへと話させることもあつた。なにか叱られて泣いたあげくさんざすねて、なんのかのと謙しにくるのさへ腹だたしく、部屋隅にひとりひつこんで、草雙紙をひろげたり、おもちゃをいぢくつたりして慰めてゐると、お犬様や、牛や、才植や、草雙紙のなかのお姫様などが、ものこそいはないが親切にいたはつてくれる。さうされれば泣きやんだくやし涙がまたとめどもなく湧きだして泣きじやくりしながら

「こんなに味方があるからいいやい」といふ氣になつてみんなを恨んでゐる。

七

夜は茶の間に集つてゐるみんなのそばでおもちやをぶちまけて遊んでゐるうちに、睡けがさしてくればあれもこれも續にさはるので痒い眼玉をこすりこすりむづかつてゐると、伯母さんは

「まあねむなつたかよ」

といひながらちらばつたおもちやをかたづけて、半分力づくに頸すぢをおさへつけてみんなに御機嫌ようをいはせるのを、寐ない寐ない」と意地ばりながら寐間へひつばられてゆく。そこに伯母さんは私を、乳母は妹を抱いてねる

ことになつてゐた。日がくるとぢきに行燈をともし、床をのべて、機嫌のわるくなりしだい寐られるやうにしてある。冬ならば幾枚もかさねた寐巻があんかにかかつて湯氣のたつほど温まつてゐるのを、仰山な様子をしてふうふう吹きながら瘦せた身體にほつこりと纏つてくれる。かけ蒲團のひとつは菊の模様、ひとつは更紗の海老色がかつた地に菊いただきや木の枝などついた舶來らしいものであつたが、その日向くさいのがよくて、ふつくらしたところへうつ伏せに顔をうづめて匂をかぐのが好きであつた。

私があかりの暗いのを怖がるもので、伯母さんは私を床にいたあとで行燈の抽匣から新規に燈心をひとすち出してつぎそへてくれる。先をちよいと油にしましてづつくりと沈んでゐる古いのそばへ並べるとばりばりと火花がちつて火がうつる。そして火皿からあまつたところがふらふらと後へ出るのを手をぶるぶるはせながらやつとかきあげて、油壺の嘴からとくとく和色種の油をつぐ。ふかふかした燈心それにぢいつと油のしみる具合、燈心おさへの恰好、油の煮える匂など。私は油のなかに蟲の死骸が黒く沈んでゐると、皿のふちに丁字がへばりついてゐるのがなにより嫌ひであつた。で、伯母さんは毎日油をかへて、きりだしの刃のつづれたのがりがりと丁字をおとしてくれる。この臆病者には行燈といふものがなるとなく氣味がわるい。ねむたい目をみはつて床のなかから眺めてゐると、丁字がしらを心に結繩形